# 春 これからの一年に想いを馳せる

文・小野 せのぶ

## 春はとくべつな季節

２００９年度が始まりました。自然塾のある富士宮市でも富士山を背景にサクラが舞い散る中、各学校にピッカピカの1年生が入学して新しいスタートを切りました。とくに今までと過ごす環境が変わらない人でも「春」というのは、今年は何をしよう?と思いをめぐらせる季節のようです。あなたは、今年をどんな1年にしたいですか?

春は自然界にも、あちこちで新しい命が誕生します。それにしても、赤ちゃんはなんで愛おしいのでしょうか?芽生えたての小さなモミジ、まだ毛の生えそろわない小鳥のひな…赤ちゃんはかわいいことで身を守っているという説に思わず納得してしまいます。

春に生き物たちが子育て・子育ち（虫などは卵から産まれて自分で育つ）をするのにはわけがあります。春には食べ物が自然界にあふれかえるのです。冬、生き物たちは厳しい寒さに耐えながらひっそりと眠るように身をひそめています。しかし、いなくなったわけではありません。春に暖かい日差しを受けて目覚めます。草花や木々が芽吹き、景色をいっせいに萌木色や若草色に染めぬきます。そのやわらかくておいしい葉を青虫たちがむしゃむしゃ食べて、その青虫を小鳥たちのヒナが食べる。その小鳥をエサとする動物の赤ちゃんがいる。生き物たちはつながりあっているからこそ、いっせいに子育ての時期を迎えます。

また、子育ての準備、親たちの愛のあふれた努力もいろんなところで見られます。耳をすましてください。聞こえてくる小鳥たちのさえずりは、自分の場所を明かしてしまうという危険を犯しながらも相手を見つけようという愛の賛歌です。そして巣材を見つけてはさかんに運ぶ鳥たち。鳥が使い終わった巣に手を入れるとそのふかふかなこと！お店もないのにどこから集めてくるのか、赤ちゃんのための最高級の素材をそろえるのです。中には巣の近くに敵が来ると、わざと傷ついたふりをして巣から敵を遠ざける鳥もいます。また、冬から

←子・親

春にかけてモグラ塚が目立つのも親の愛。やがて生まれてくる子どものためミミズがたくさんとれるようにトンネルを修理して拡張する工事をすませておくのです。水辺では、年に一度たくさんのヒキガエルが集まって交尾産卵を行う合同結婚式やフナができるだけ浅瀬に泳ぎ産卵する姿が見られます。大きな魚が来ない安全地帯である浅瀬は赤ちゃんの格好のゆりかごとなるからです。こうした親たちの愛のもとに、新しい命は誕生します。

## そして続く命のリレー

口をあけてエサをねだるツバメの子ども。サクラの葉っぱをむしゃむしゃ食べる毛虫。あちこちに現れる自然界の赤ん坊たちは毎年見られる「春」の定番風景です。親の背中につかまりながら育つクモの仲間や育てられた最後には母親を食べて栄養として取り込むハサミムシの仲間、卵から産まれて以来ずっと親を知らずに育つ虫の子など親との関わりはさまざま。それでも確実に親から子へ命は受け継がれていきます。生き物がそこにいるということは、生命誕生以来の命のリレーが続いてきた証拠なのです。

春、あちこちで小さな命を見るたびに「今年のあなたはどんなふうに過ごす?」と問いかけられているような気がします。こうやって自然に産まれた赤ん坊たちの中で、大人になるまで生き残るものはほんのわずかです。大人になるまで生きたとしても、寿命は1年もないものもたくさんいます。人間は彼らよりも長く生きる生き物。だから大変だなあと思う人もいれば、失敗してもまたチャレンジできるなど長い方がいいと考える人もいるでしょう。でもどちらも正解。長く続くことは大変なことでもあり、それを乗り越えるからこそ味わえる喜びもあると思います。そして、虫も鳥も人も「それぞれ精一杯生きている」ということでは、本当は一緒。もう二度とやってはこない『今』という時間を、そして限りある命を精一杯生きている生き物なのです。